

人生の一大転機がやってきた！

ふくやま とおる
福山 透

東京大学大学院薬学系研究科

福山君、ハーバードに行かないか？

テトロドトキシンの全合成が完成し、合成ルートの改良と最終物の結晶を得るための原料合成に取り組んでいた修士2年生のはじめごろ（1972年）、突然岸さんに「福山君、この夏から1年間ハーバード大学の客員教授をやることになったから一緒に行かないか？」といわれた。まさに青天の霹靂で、人生における一大転機の訪れだった。

一応、提案のかたちにはなっているが、この場合「一緒に来い」ということなので、一も二もなく「はい、行きます」と答えたものの、いったいどうなるのか見当もつかなかった。とりえず英会話をやらなければと、大学の近くに住むアメリカ人のおばあさんの英会話教室に週1回通うことにした。実は教養部2年生のとき、学生10人をアメリカに1か月間短期留学させてくれるという名古屋テレビの企画に応募したことがあった。筆記試験の成績は2番だったが、アメリカ人相手の面接では「アー、ウー」状態でまともな会話が成立せず(?)落とされた経験があった。ようするに、英会話なんてやったことがなかったのである。



冬のハーバード。岸研は、1974年の夏にMallinckrodt Building (右の建物)の3階に入った。

そんなわけで英会話教室に行きはじめてが、そのときも実験に明け暮れていたので予習復習をする余裕もなく、ほかの生徒たちのなかでいつも辛い思いをした。何度か通ったある日、先生に「You are hopeless」といわれ、「このク○○ア誰がこんなところに来るものか!」と、やめてしまった。しかし今になって「本当に先生が“You are hopeless”といったの？」

と聞かれれば、「ひょっとしたら聞き間違えたのかも」というくらい、お粗末な英会話力だった。

「モンブラン」と苦い恋

そのころ、岸さんに「身辺整理をするなら今のうちにおけ」と何やら意味深なことをいわれた。岸さん自身はハーバード大学で客員教授を1年務めて帰国し、私をWoodward先生にあずけてPh.D.を取らせるつもりだったのだ。長期滞米となれば、(もし彼女がいるのなら)結婚してアメリカに連れていったほうがよいという意見で、私生活においても人生設計の急激な変更に迫られた。

実は、中学、高校、大学を通して秘かに思いを寄せていた女性が近所にいたのだが、大学に入ると「博士号を取るまでは絶対に結婚しない」と決心し、恋愛感情をきれいに消去した近況報告だけの手紙をときどきだすくらいで、なるべく接近しないようにしていたのだ。残された時間は3か月足らず。清水の舞台から飛び降りる覚悟で彼女に会い、アメリカ行き(つまり結婚)をお願いしたが、彼女にとってはあまりにも唐突な話で、当然否定的な答えしか返ってこなかった(相手のことを考えずにモノをいうところは今でも変わっていない、と誰かの声が聞こえてきそうだ)。

翌日、岸さんに現状を報告すると、「僕が会ってアメリカ生活について説明してあげよう」といつてくれた。岸さんくらい押しが強ければ説得できるかもという他力本願で、さっそく彼女に連絡し、名古屋栄のテレビ塔近くにある「モンブラン」という喫茶店で午後3時に会う約束をした。当日は雨が降っていて、約束の1時間ほど前に喫茶店に到着し、ふと看板を見上げたとたん、全身からサーッと血の気が引いた。なんとその喫茶店は「サンモリッツ」という名前で、「モンブラン」などという店はどこにもなかったのだ! 喫茶店などほとんど行ったことがない私は、半年ほど前に中学の同級生と入ったときに食べた“ケーキ”のモンブランを店の名前だと記憶違いしていたのだ(どちらもスイスの山の名前だ

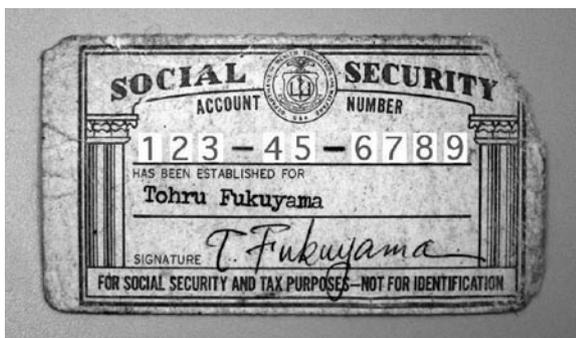
し…。本当はそこで待っていたほうがよかったのだが、パニック状態の私は岸さんに電話して大学に待機してほしいと頼み、彼女が帰宅時に通るはずの名鉄名古屋駅の改札口に直行した。ところが2時間待っても彼女は現れず、ガックリ肩を落として帰宅した。その夜電話してわかったのは、彼女は私が国鉄で通っているのを知っていて、国鉄名古屋駅の改札口で私が現れるのを待っていたのだ。結局、もう会わないほうがよいと彼女に告げられ、私の地中深く潜った蟬のような恋（片思い）は結局を迎えた。いまだにモンブランを食べると、あのころの間抜けな自分を思いだして苦笑する。

この連載を書くことになったとき、岸さんに「君みたいにおっちょこちょいな人間がよく引き受けたな」といわれたが、昔から弱みを握られている私は何もいい返せなかった。

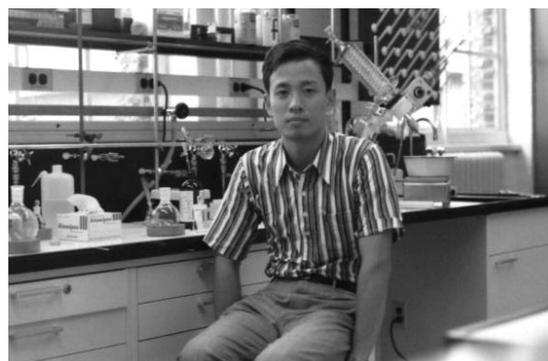
はじめて見るアメリカ大陸

当時、私のまわりで飛行機に乗ったことのある友人は1人もおらず、墜落事故も今より多かったので、いざ自分が乗るとなれば、50%くらいの確率で太平洋の藻くずとなってしまうような心細い気分だった。

8月のはじめに羽田から飛び立ったが、飛行機は思ったよりもずっと静かで揺れないことに驚いた。そのころはジャンボジェット機が東京-ニューヨーク間に就航してまだ間もないときで、ほとんどがホノルルかアンカレッジで給油してからアメリカ本土に向かうルートだった。ホノルル・ロス経由でボストンに向かった私は、はじめて見るアメリカ大陸の広大さに圧倒された。一足先に渡米していた岸さんがボストンのローガン空港に迎えに来てくれていて、ハーバード大学の職員用アパートに連れていってくれた。緊張と物珍しさで一睡もしておらずヘトヘトだったが、「今寝たらダメだ。12時近くまで起きていて、それから寝れば時差ボケが軽くなる」という岸さんの忠告に従って、閉じようとする瞼をこ



なんとか手に入れた年金カード。番号は秘密。



設立したての岸研のベンチにて。渡米直後で少し緊張気味？

じ開けてテレビを見た。しかし正直いって、あれほどひどい時差ボケにはそれ以後なったことがないので、今でもあの時差ボケ解消法が本当に正しかったのか疑っている。

地獄の毎日が始まった

翌日、「助けるのは君のためにならないから、諸手続きは全部自分でやるように」と岸さんにいわれ、地獄の毎日が始まった。私の英会話力はゼロに近かったので、とにかく体当たりでやるしかないのだ。

Holyoke Centerの留学生オフィスで手続きをしたあと、銀行口座を開くための年金カード（Social Security Card）を取得しにバス停に向かった。ところが、日本みたいなバス停はなく、至るところにただ「Bus Stop」と書いたサインがあるだけで、バスの運転手も「（次は）どこどこです」といつてくれないのだ。ハッキリいって恐怖である。これで本当に目的地に行けるのだろうかと心細かったが、なんとかオフィスにたどり着き、年金カードを手に入れた。このカードに付された年金番号は、銀行口座の開設に必要なだけでなく、あらゆる機会に必要な重要なもので、日本国民の大多数（とくに金持ち）が恐れる「国民総背番号制」そのものである。給料だけでなく、いろいろな収入がこの番号によってワシントンの税務局（Internal Revenue Service）のコンピュータのなかに入っているの、下手に所得をごまかそうとすればあとでひどい目に遭う。

それから数日後、Bloch研ポスドクの町田善正さん（現エーザイ）が住んでいる木造3階建てアパートの屋根裏部屋が空いているというので、そこに住むことになった。大学から歩いて15分ほどのHarvard Street沿いにあるこのアパートは今でも残っていて、私のさまざまな思い出がそこに詰まっている。